て、そのコピー四百ページを三回に分けて航空便で送って下さったこともある。確かその時、私は、お礼をかねて、三十ドルばかりの為替と、歴史小説がお好きだとうかがっていたので、「元禄太平記」を送ったことを覚えている。めんどうなお願いをしたにもかかわらず、そのつど送って下さった御親切に私は心から感謝した。おまけに、自分ではあまり手紙をお書きにならず、ほとんど奥様に書いてもらうという鍋田さんが、私には必ず自筆で返事を下さるのである。そんな事情を知って、私は、現在の日本で失われようとしている暖かい人間性を、はるかカナダにおられる鍋田さんの中に見い出したのである。

ともかくも、鍋田さんに迷惑をかけながらも、私自身は神田の古本屋をあさりつつ卒論を完成し、大学を卒業した。

その後教職につき、やがて結婚し現在に至っているが、その間ずっと鍋田さんとの文通は続けていた。ライラックの花の下、広い自宅の庭で写された写真を送って下さったのもその頃であった。大学卒業のお祝いにとメダルを、結婚のお祝いにとトロントの写真集を送って下さったことも、昨日のように思い出される。そして去年(一九七八)の九月九日、奥様からの手紙で、八月六日に鍋田さんが亡くなられたことを知ったのである。

「朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり、すでに無常の風来たりぬれば、すなわち二つの眼、たちまちに閉じ、一つの息長く絶えぬれば、紅顔むなしく変じて桃李のよそをいを失いぬる時は、六親眷属集まりて、なげき悲しめども、更にその甲斐あるべからず、さてしもあるべきことならばとて、野外に送りて夜半の煙となし果て見れば、ただ白骨のみぞ残れり。」奥様からいただいた手紙にはこう書かれていた。

私は鍋田さんを通してカナダを知り、日系カナダ人を知った。それは小さなカナダ、ごく小さなカナダなのかもしれない。しかし、カナダは鍋田さんを通して身近な国となったのである。

私の心の中のカナダ

栃木県宇都宮市・片岡法子

私が初めてカナダという国に魅せられたのは、あのモンゴメリの「赤毛のアン」を読んでからである。どうしてもプリンス・エドワード島に行って、その美しい四季によって変わる草や花や木々を見たいと思った。輝く湖、恋人の小径、お化けの森に行き、そしてミス・アン・シャーリーのように想像しなくてはいられなくなったのである。現実の中でコンプレックスを感じたり、苦しんだりしている私を、人は逃避というけれど、想像することで紛らわし、そうすることによって新たな希望を見出して行く——そういう私を想像の世界へ導き、希望を与えてくれる。

さらに私にとって、カナダは幻想と神秘の国なのである。

誰もいないロマンチックな草原を一人でどこまでも歩き、木洩れ日の美しい森を通り抜けると、そこには今まで見ることのできなかった、まるで新しい世界を発見したかのように素晴しい景観にはっとさせられるだろう。そして、私が悲しい時、きっと森にさすさんさんとした太陽が私の悲しい心を暖めてくれるだろうし、楽しさに酔いしれて有頂点になっている時、あの氷河で削られたロッキーの山々は私の心を突き刺すだろう。また精神が安定しない時、静寂しきった湖が私にその静寂をいくらかでも分けてくれるだろう。何か思いにふけりたい時は、のどかな草原の穏やかさが考える題材を与え、私をミス・アン・シャーリーと同様、想像の世界で楽しませるだろう。

カナダは、私の前に、威厳たっぷりの顔をして魔法使いのごとく立ちはだかることだろう。私が想像できないほど広い草原とロッキーの山々、それに囲まれた静かな湖を目の前にしたら、私は、その広大さと神秘性にうろたえ、そこに存在する無数の魂の声を聞くことができることだろう。

カナダは、誰にも邪魔されない雄大な自然に、犯すことのできない威厳があり、その大自然は人間のクリエイティブな考えを寄せつけない。たとえ人間がかってにクリエイトしても調和しない。まるで一つ一つの木や石や山にそれぞれの違った何かを持っているような、人間の力をはねのけてしまうような、そんな気がする。ことばのないコミュニケーションが成立するのならば、きっとそんなカナダをおいてはないのではないだろうか。長い年月をじっと動かずにいる自然とディスカッションしてみたい。

何百年たっても時の流れの中を動くのを止められたタイムマシンのごとく変わることのないロッキーの山々を描いてみたい。どこをとってもキャンバスに向かって描きたくなるような、木枠を通してどこを見てもそのまま絵になる自然と静寂がカナダにはある。季節や天気により、木々や草花、山々の色が変化する、その変化は、何度同じ所を描いてもちがった絵にしてしまうだろう。そして、鉄柱や電線を気にせずに自然が描けるのだ。ああ、そういうカナダをおもいきってキャンバスにぶつけたい。でも、きっと最初はだれでも目をそらす気になれず、筆をもったまま描く楽しさも忘れるのだ。美しいものを素直に美しいと表現できる目と心があれば、きっとカナダのとりこになれるのだ。

私がカナダに興味をもつのは、もちろん、自然だけではない。カナダ人が季節の変化の中で作ってきた生活様式や習慣、現代日本の若者に見られる関心ごととの違い、考え方についても知りたい。